

2014年12月28日 礼拝メッセージ

聖書：ヨナ書3章1～10節

説教：思い直す神

あらすじ

神は、ひどい悪を行っていたニネベの町に向けて預言者ヨナを送ろうとします。ところがヨナは神のことばに逆らい、ニネベとは反対の方向に逃げるため、身分を隠して船に乗るのですが、その船に嵐が襲って来ます。追いつめられたヨナは隠れることができません。自分は神から逃げていて、嵐はそのため神が起こしたものであること。自分を海に投めば船は助かるだろう。そのように告げます。船員たちは迷った末にヨナを海に投げ込み、助かりました。一方のヨナは、海の中でもがき苦しみ死にかけるのですが、神は大きな魚にヨナを飲み込ませ、助け出します。ヨナは神が自分を助けてくださったことを思い起こし、感謝の祈りをしました。それが前回までのあらすじです。

1 ニネベの人々

1) 反応

神は再びヨナを呼び、ニネベに遣わします。当初ヨナは、ニネベの町を三日かけて回る計画だったようです。ところが最初の日にヨナが、「もう四十日すると、ニネベは滅ぼされる」と叫ぶと、思いがけないことが起きました。ヨナのことばはすぐにニネベの王の耳に届きます。王はただちに王座から降り、服を脱いで荒布をまとい、灰の中に座りだしたのです。そして、町の人々に次のようなおふれを出しました。「人も、獣も、牛も、羊もみな、何も味わってはならない。草をはんだり、水を飲んだりしてはならない。人も、家

畜も、荒布を身にまとい、ひたすら神にお願いし、おのおの悪の道と、暴虐な行いから立ち返れ。もしかすると、神が思い直してあわれみ、その燃える怒りをおさめ、私たちは滅びないですむかもしれない。」

二つ不思議なことがあります。一つは、ニネベの王様も町の人々もどうしてすぐに悔い改めていったのだろうか。というのは、それまで彼らは何をしていたのですか。神が怒り出すほど、この町の人々は悪という悪の限りを尽くしていたのです。そんな人たちが、簡単に悔い改めるのだろうか。これが一つ目の疑問です。

二つ目。普通、悔い改めというのは人間がすることです。ところがニネベの王様は、人だけではなく、家畜もペットもとにかく身近にいる動物たちもいっしょに悔い改めなさいと言うのです。ある学者は、当時ニネベの町があったペルシャ地方にはこのような風習があったので別に驚くことではないと説明しています。

でも動物に何か悔い改めるべき責任があったのでしょうか。悪いのは人間です。アダムとエバが罪を犯した結果、土地はのろわれてしまい、動物たちも人間の罪の被害を受けてしまったのです。ですから王様が動物たちも悔い改めの姿勢を見せなさいと語ったのは、明らかに行き過ぎとも言えます。

では、神はこのことをどのようにご覧になったか。10節です。「神は、彼らが悪の道から立ち返るための努力をしているのをご覧になった。」神は、ニネベの人々を笑った

りしません。どんな方法であれ、悔い改めなければならないと真剣に受けとめようとしている、その姿をご覧になり、それをよしとされました。

2) なぜすぐに悔い改めたのか？

さて一つ目の疑問に戻ります。ニネベの人々はなぜすぐに悔い改めたのか。

初めて教会に行ったら、いきなり「あなたは罪人です。神は罪をさばきます」と言われてびっくりしたという経験をお持ちの方もいるでしょう。それを聞いたとき、神を信じるどころか、むしろ反感を持った。そういう方もいます。

ところがニネベの人々は、「あなたがたは罪人です。神はニネベをさばきます」と語ったヨナのメッセージを聞いて、すぐに悔い改めたというのです。その理由は何も書いていません。でも手がかりは用意されています。こここのところを、すべてが神の計画の通りに進められている。そのような視点からもう一度見直してみたら何が見えてくるでしょうか。

ヨナは、最初にニネベに行きなさいとの命令を聞いたとき、神に逆らいました。ヨナは神のご計画を妨げたかに見えます。けれども、神はヨナが逆らうことを知らなかったはずはありません。逆らうことを知っていながらヨナを呼び出したのです。そうしますと、ヨナは神の計画を妨害したのではなく、むしろ神のご計画のとおり歩んでいったこととなります。ヨナが逆らうことが神の計画。いったいなぜそう言えるのか。

2 神の救いの計画

神は、ニネベの人々が救われるためにどう

したらよいか、最善の方法を考えました。ただ預言者を送り、さばきのメッセージを語ったとしても、ニネベの人たちには聞く耳などありません。かえって、遣わした預言者を笑い、石を投げて追い返してしまうだろうということ、わかっていました。

それで、神は別の方法をとることにしました。預言者をただ遣わしてさばきのメッセージを語らせるのではなく、ヨナにある「しるし」をつけて送り出すことにしました。

「しるし」とは何か。ヨナの身に何が起きたのか。もう一度おさらいします。船が嵐に遭い、船は沈みそうになったとき、乗組員たちは犯人捜しをするためにくじを引くことにしました。そうしたらヨナに当たってしまいます。もう自分は逃げられないと観念したヨナはこう言うのです。「私を捕らえて、海に投げ込みなさい。そうすれば、海はあなたがたのために静かになるでしょう。わかっています。この激しい暴風は、私のためにあなたがたを襲ったのです。」

その結果、ヨナは荒れ狂う海の中に投げ込まれ、海の深みに落とされ、おぼれ、もがき苦しみました。もうだめだとヨナが死にかけたとき、神は大きな魚の腹の中にヨナを飲み込ませ、三日目に陸地にはき出され、ヨナは救われます。これがヨナの身に起きたことです。

陸地にはき出された後、ヨナは再び呼びだれて、ニネベの町に向かいました。どんな町であろうとも、当時の世界では、よそ者は怪しい者ではないかと思われ警戒されます。ヨナは普通の人以上に警戒されました。なぜか。なにしろ海でおぼれ、死にかけたのです。魚の腹の中に三日間も飲み込まれていたのです。普通の姿ではありません。皮膚がただれ、

顔のかたちも崩れ、だれが見ても異様な姿。当然、いろいろな質問を受けます。「いったいおまえは何ものだ。なぜそんな姿をしているのか。」

ヨナは自分の身に起きたことを正直に話しました。ニネベの人たちは、それを聞いてどう思ったでしょう。海に投げ込まれたけれど、魚に飲み込まれて助かった。普通ならありえない話です。笑って当然です。では笑ったのか。いいえ、笑えません。どうして笑えないのでしょうか。ヨナのからだに刻まれた傷跡を見たからです。その傷跡は何を語っているのでしょうか。神に逆らう者を神はどこまでも追いかけて、必ず罪をさばく。ヨナのからだには神のさばきの跡が生々しく残っています。そのヨナが「もう四十日すると、ニネベは滅ぼされる」と叫んだのです。嘘ではない。これは本当だ。ニネベの王が王座から降り、真っ先に悔い改めるほど、ヨナの姿とことばとは人々に大きな衝撃を与えました。

3 ヨナのしるし

1) さばき

神は、ヨナのからだに「しるし」を刻みました。そのヨナについてイエスは言われました。「この時代は悪い時代です。しるしを求めているが、ヨナのしるしのほかには、しるしは与えられません。」(ルカ 11 章 29 節) 主は、ヨナのしるしとしてこの時代に來られたと言います。ヨナのことから、イエスの十字架について三つのことが見えてきます。

一つ目。ヨナは神から逃げたことにより、さばきを受け海に投げ込まれてしまいました。それと同じように、十字架は、たとえ神のひとり子であろうとも罪ある者となった以上、容赦なくさばく。神は罪を絶対に見逃

すことはない。そのことを私たちの目にはつきりと見えるようにと、主は十字架で死んでくださいました。それがヨナのしるしの一つ目です。

2) よみがえり

二つ目。主がよみがえられたとき、弟子たちの中で最後まで主のよみがえりを信じなかったトマスを思い出してください。トマスは結局何を見て信じたのか。主の手にあった釘の跡、主の脇腹にあった傷跡です。それを見たとき、トマスはことばを失い、ただこう告白しました。「私の主。私の神。」主の傷跡がトマスを信仰へと導きました。ニネベの人々も、ヨナのからだに刻まれた傷跡を見て、悔い改めた。

主のからだに刻まれた傷跡は、私たちを救いに導くためのしるしとなりました。

3) 思い直す神

三つ目。最初神はニネベを滅ぼそうと考えておられましたが、人々が一生懸命悔い改めようとしているのをご覧になり、滅ぼすことを止めました。神が思い直したからだと書いています。どこかの神さまのように、必死に押し倒せば心変わりする。そんな方に見えます。そうではありません。神は必ず罪をさばく方です。絶対にその原則は変わりません。ではニネベの場合はどうなるのか。ニネベはさばかれない。その代わり、父なる神のひとり子イエス・キリストが十字架でさばかれました。

王は言いました。「もしかすると、神が思い直してあわれみ、その燃える怒りをおさめ、私たちは滅びないですむかもしれない。」

神は罪を悔いる者をあわれみ、そのさばき

を思い直します。罪のことを忘れ、水に流したという意味ではありません。神が思い直したというとき、私たちが受けるべきさばきを御子イエス・キリストが身代わりに受けてくださる。神はそう決心されたということです。

十字架は、さばきを思い直す神であること
のしるしとなりました。だから恐れなくて安心して神に近づくことができます。私たちはその十字架に招かれていた者であったことを思い起こします。